なんの花か薫る

山本周五郎

著者の了
解により
検印廃止

昭和34年7月5日　第1刷発行
昭和37年2月20日　第3刷発行

なんの花か薫る

¥ 190

著者　山本周五郎
発行者　野間省一
印刷所　豊国印刷株式会社
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽町3ノ19
振替東京3930
電話大塚(941)大代表3111

© 山本周五郎 一九五九

(落丁本・乱丁本はおとりかえいたします)　(加藤製本)

なんの花か薫る

山本周五郎

談社　ロマン・ブックス　¥190.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

著者の了
解により
検印廃止

昭和34年7月5日　第1刷発行
昭和37年2月20日　第3刷発行

なんの花か薫る

著者　山本周五郎
発行者　野間省一
印刷所　豊国印刷株式会社
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽町3ノ19
振替東京3930
電話大塚(941)大代表3111

¥ 190

© 山本周五郎 一九五九

(落丁本・乱丁本はおとりかえいたします)　(加藤製本)

なんの花か薫る

山本周五郎

ロマン・ブックス

目次

なんの花か薫る……一〇
夜の辛夷……五四
つゆのひぬま……九〇
しづやしづ……一四二
鶴は帰りぬ……一九〇
螢放生……二四〇

なんの花か薫る

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertong

一

お新は初めてのとき、江口房之助が馴染みになるとは思わなかった。馴染みになる客はたいてい勘でわかる、顔だちとか軀つきでなく、はいって来たときの感じで、なにかしらふっと通じるように思う。そんなときは相手のほうでも同じように感じるとみえ、たいていのばあい、お新の客になるのであった。

房之助が来たとき、お新は戸口に立って、彼が呼びかけるまで、ぼんやりしていた。

十月中旬の、夜の十時すぎ、——とっつきの三帖で、菊次が曾我物語を読んでいた。みどりと吉野には泊り客がついて、それぞれの部屋へはいってしまったし、寒がりの千弥は、菊次のそばで火鉢にかじりついたまま居眠りをしていた。お新もそろそろ店を閉めようと思いながら、戸口の柱にもたれて、菊次の読む声をぼんやり聞いていた。物語は九月十三夜の、——まことに名ある月ながら、というくだりになっていた。五人いる女たちのなかで、菊次はいちばん年嵩の二十八だし、読み書きのできるのも彼女ひとりだったが、曾我物語はたびたび読んで

もらうので、お新も（特に十三夜のくだりは）殆んど、そらで覚えていた。

――まことに名ある月ながら、くまなきかげに兄弟は、庭にいでて遊びけるが、五つ連れたる雁の、いづくをさして飛びゆくらん、一とつらもはなれぬ中のうらやましさよ、……そして「五つある一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらん。わどのは弟、われは兄、母はまことの母なれど」というところなど、お新は口ずさむたびに、自分の身にひき比べて、そっと涙をのむような気持になるのであった。

菊次が読み進んで、「――兄が聞きて、袖にて弟の口をおさへ、かしがまし、人や聞くらん、こゑ高し、隠すことぞ」というところまできたとき、その客がこっちへ近よって来て、お新の前で立ち停った。

「もし、そこのお武家さん」と向うの家のおそめという女が呼びかけた、「あたし、あんたを知ってるわ、寄ってちょうだい、知らん顔するなんて薄情ですよ」

すると、その客は、もっとお新のそばへ来た。強い酒の匂いと、激しい息づかいが感じられ、お新はちょっと身を反らせた。

「あがれないのか」と、その客が言った、「泊らせてもらいたいんだが」

「お向うのお馴染みじゃあないんですか」

「初めてなんだ」とその客はおちつかないようすで、うしろの暗がりをすかし見たりした、

「いま喧嘩をして追われているんだ」
まだ若い侍で、ひとがらも尋常だし、口のききようも、うぶらしかった。お新は「どうぞ」とその客を入れ、三帖へ「姐さんお願いします」と声をかけてから、客の履物を持って、自分の部屋へ案内した。——それが江口房之助であった。
あとで聞くと、年は二十二だったが、軀つきも細く、背丈もあまり高くないので、まるでまだ少年のようにみえた。おも長の、眉のはっきりした顔は、蒼ざめて硬ばり、ひどく昂奮しているようすで、刀をお新に渡すとき、その手がぶるぶると震えていた。
「おぶうを持って来ますわ」とお新が刀をしまいながらいった、「済みませんが、おつとめを頂かしてね」
房之助は「おつとめ」の意味を知らなかった。お新が説明すると、慌てて、いわれた倍額を出し、懐紙に包んで渡した。
——本当に初心なんだな。
とお新は思った。内所へゆくと、主婦のおみのは寝ようとするところだった。お新は定りだけ渡し、茶を淹れて戻った。房之助は腕組みをして壁によりかかり、かたく眼をつむっていた。お新はお茶をすすめ、「埃が立ちますけれど、ごめんなさい」といって、夜具を出してそこへのべた。

「済まないが、水を呉れないか」と房之助がいった、「それから、誰か捜しに来るかもしれないけれど、そのときは匿まってもらえるだろうかね」

「ようございますとも」とお新は寝衣と帯を出してやった、「これに着替えて、さきに寝ていて下さい、いまお冷を持って来ますから」

房之助は水差しいっぱいの水を、続けざまに、すっかり飲みほしてしまった。お新はすぐにくみ直して来て、客の脱いだ物を片づけながら、どこで誰と喧嘩などしたのか、と訊いた。房之助は「よくわからないんだ」と、枕の上で頭を振った。——湯島の天神前にある料理茶屋で、同じ家中の若侍たちが宴会をした。人数は十五人、彼はそんな席へは初めてなので、みんなに面白がって飲まされ、なにもわからないほど泥酔してしまった。どうして喧嘩などになったのか、はっきりした記憶はない。覚えているのは、二、三の友達に抱きとめられたこと。手から刀をもぎ取られたこと。その茶屋から逃げだしたこと。友達が「刀は拭いておいたが、すぐ研ぎに出せ」とか、「今夜は屋敷へ帰るな」とか、「みんなべつべつになって逃げろ」などといった、断片的なことばかりであった。

「では人をお斬りなすったんですか」

「よくわからないが、そうらしい」と房之助は頼りなげにいった、「——死にはしなかったようだけれど」

「相手は御家中の方ですか」
「隣り座敷の客だそうだ、侍か、町人かも、聞かなかったけれどね、隣り座敷にも宴会があって、その内の一人とやったんだそうだよ」
「それなら、このままではいけないわ」
そういって、お新は立ちあがった。
袋戸棚へしまった大小を、箪笥の中へしまい直して鍵を掛けた。それから、太織縞の袷を出して、衣紋竹で壁へ吊り、房之助の髪を解いて、ざっと束ねた。
「お侍さんは髪でわかりますからね、これでいいわ」とお新がいった、「いま、菊次姐さんにいって来るけれど、あなたはあたしの馴染みで、指物職の泰次という人のつもりよ」
「泰次、——どう書くんだ」
「知らないわ、あたし」とお新はいった、「職人ですもの、どう書くんでもないでしょ」
房之助は微笑した。
お新は菊次のところへくちを合わせにゆき、戻って来ると、寝衣になって、房之助の脇へはいった。房之助は必要以上に夜具の端へ軀をよけ、そうして、固くなって震えた。
「それじゃあ、風がはいって寒いことよ」とお新は手を伸ばした、「喰べやしませんから、もっとこっちへお寄りなさいな」

二

お新が横になると、まもなく、表に、ざわざわと、人ごえが聞えだした。北のほうから軒並みに、もうたいがい店を閉めているらしいが、寝てしまった家は叩き起して、相当ものもしくしらべながら、しだいにこちらへ近づいて来た。

「あら、梅さんがいるわ」お新は頭をもたげていった、「あれは行徳の梅さんの声だわ」

「梅さんて、——役人か」

「ここの地回りよ」とお新がいった、「あの人がいれば、よその者は入れないんだけど、付いて回ってるとすると、用心するほうがいいかもしれないわ」

お新は説明した。地回りというのはやくざで、こういう娼家にこびりついて食っているが、その代り土地にもめごとが起ったりすると、軀を張って捌きをつけ、娼家に迷惑のかからないようにする。だが、兇状持などが紛れ込んだばあいには、岡っ引といっしょに付いて回るし、そんなときは土地の事情に通じているから、よほど用心しなければならないのだ。お新はそう話して、帯を解いて下さいといい、自分もしごきを解いた。

「どうするんだ」と房之助はどもった。

「いまにわかるわ」とお新はいった、「さあ、帯を解いて、——それから、いよいよとなって

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong